

戯曲

「夜空を見上げるのに理由はいらない」

作　ササキタツオ

「夜空を見上げるのに理由はらない」  
作 ササキタツオ

《人物》

青野雫（17） 高校2年生 演劇部

城田大介（17） 高校2年生 美術部

二人は、仲良し。

でも、付き合っているわけではない。

《舞台》

全編・夜の公園で展開される。

街灯だけがうっすらと二人を照らし出す。

《あらすじ》

青野雫（17）は、城田大介（17）を無理やり誘って夜の公園で天体観測を決行する。

雫は、この天体観測で、大介との距離を縮めたいと思っている。だが、大介はなにやら様子がおかしいようで……。

果たして、雫の想いは届くのか！？

真冬に贈る、ちよつと切ないキュン・スト

ーリー。

「夜空を見上げるのに理由はらない」  
作 ササキタツオ

《本編》

○公園（夜）

真冬の夜である。

城田大介（17）と青野雫（17）が  
並んで夜空を見上げている。

何か見えているのか、じっと見つめて  
いる、二人である。

寒そうだ。終始、震えながらの会話。

大介「んー」

雫「あそこだよ。あそこ！」

大介「んー。見えるような、見えないような」

雫「見える」

大介「星か？」

雫「星です」

大介「絶対？」

雫「絶対」

大介「でもあれ、人工衛星じゃね？」

雫「え？」

大介「点滅しているような」

雫「目、霞んでるんじゃないの？」

「夜空を見上げるのに理由はいらぬ」  
作 ササキタツオ

大介「いやー、うん。確かに点滅してる」

隼「してない」

大介「してる」

隼「それさ。違ふところ見てない？」

大介「言われた通りの方見てるよ」

隼「本当？」

大介「ホント」

隼「じゃあ、それが、オリオン座です」

大介「え？ つと……あー。どれだっけ？」

隼「だから、あそことあそこが、つながって、

こう、砂時計みたいになつて、つて言っ

たよね？」

大介「あそことあそこじゃわかんねえよ」

隼「やっぱりわかつてなかつた」

大介「どこだよ？」

隼「三つ並んだ星。それが目印」

大介「ああ……んー」

隼「あそこだよ？」

大介「わかつてる（と探して）」

隼「（呆れて）うわー……」

「夜空を見上げるのに理由はいらない」  
作 ササキタツオ

大介「んー」

雫「絶対わかってない」

大介「わかってる」

雫「オリオン座だから点滅とかしないから」

大介「え？　しないの？」

雫「ホントどこ探してるの？　人工衛星ではないから。星だから。点滅とか断じてしないから」

大介「そっか」

雫「そうだろ」

大介「あー。わかったわかった！」

雫「ホント？」

大介「こう、3つ並んでるやつだろ……なんだっけ？」

雫「オリオン座のベルト」

大介「オリオン座のベルト。これがそうか」

雫「全く」

大介「え。3つ並んでる星って何ていうの？」

雫「へ？」

大介「名前」

「夜空を見上げるのに理由はいらぬ」  
作 ササキタツオ

雫 「左から、バカ・アホ・マヌケ」

大介 「は？」

雫 「ウソー」

大介 「いや。わかるけど」

雫 「大介の事だし」

大介 「あのな……。じゃあ、赤・青・緑」

雫 「え？」

大介 「光の三原色」

雫 「お。さすが美術部」

大介 「ってか、もしかして星の名前知らない？」

雫 「まさか」

大介 「まさか？」

雫 「……」

大介 「んだよ。知ってるような口ぶりだった  
ろ」

雫 「そこまで詳しいわけではない」

大介 「なんだよ。じゃあ、調べるか？」

雫 「いや。いい」

大介 「なんで？」

雫 「夢がなくなる」

「夜空を見上げるのに理由はらない」  
作 ササキタツオ

大介「夢？」

雫「星のロマン」

大介「なんだそれ」

雫「知らない方が、いいこともある」

大介「よくわからん」

雫「見上げてそこにあれば、いいんだよ」

大介「じゃあ。名前つけようぜ」

雫「え？ 名前？」

大介「あの3つ並んでいる星」

雫「名前ねえ」

大介「いいだろ。名前」

雫「トム・ジム・ケビン！」

大介「は？ 誰？ 外人？」

雫「うん」

大介「トムヤムクンみたいじゃね？」

雫「えー。じゃあ、加藤・佐藤・鈴木？」

大介「は？ 今度は、日本人？」

雫「だいぶ、ぽくなつたかな？」

大介「なら、信長・秀吉・家康がいいな」

雫「えー。ジジくさ」

「夜空を見上げるのに理由はいらない」  
作 ササキタツオ

大介「いいじゃん。強そうで」

雫「松・竹・梅は？」

大介「いや、お正月かよ。意味わからん」

雫「信長・秀吉・家康も意味わからんよ？」

大介「いやだって、星の名前って、昔の神話

とか、伝説とか、偉人の名前とかをとるん  
じゃないの？」

雫「わかったよ。じゃあ、私たちのオリオン

座は、信長・秀吉・家康が目印ってことで」

大介「なんか、いいかも」

雫「なんだかなあ」

しばらくの間。

夜空を見上げる大介と雫。

大介「なあ。雫」

雫「ん？」

大介「いや。やっぱいいや」

雫「なに？」

大介「やっぱいい」

雫「言いかけてやめるの気持ち悪い」

大介「ゴメン」



「夜空を見上げるのに理由はいらない」  
作 ササキタツオ

雫「言って」

大介「俺さ、告白された」

雫「え……」

大介「マジ」

雫「マジ？」

大介「うん」

雫「相手は？」

大介「相手は……C組の立石さん」

雫「え。ウソ！？ あのオシヤレで可愛い子？」

大介「んー。まあ、そうかな」

雫「ダサーい大介には不釣り合いだなあ」

大介「俺もそう思う……！」

雫「いやでもオシヤレな立石さんが、ダサーい

大介の事が好きだったとはねえー」

大介「イチイチ、オシヤレとかダサーいとか言

わない」

雫「にわかには信じられない……！」

大介「事実だよ」

雫「ってか、そんな大事な話。なんで私に言

うの？」

「夜空を見上げるのに理由はいらぬ」  
作 ササキタツオ

大介「え？」

雫「どうして？」

大介「それは……幼馴染み、だから」

雫「は？」

大介「それに天体観測仲間だから」

雫「口、軽過ぎじゃない？」

大介「いや。雫にしか話してないけど……」

雫「余計に謎。なんで私なの？」

大介「だって。大体俺の悩みごとの相談に乗ってくれるのって、雫じゃん」

雫「相談できる相手が他にいないから、私にするの？」

大介「そういうんじゃないけど」

雫「じゃあ、何？」

大介「もういい」

しばらくの間。

雫「……で。返事したの？」

大介「まだ」

雫「しないの？ 返事」

大介「するよ。しようと思ってる」

「夜空を見上げるのに理由はいらぬ」  
作 ササキタツオ

雫「え。絶対、返事しなよ。返事しない男は最低だからね」

大介「わかってるよ……」

雫「わかってるのかなあ」

大介「わかってる」

雫「どれ。私が相手役やってあげようか？」

大介「え？」

雫「告白の返事の練習」

大介「なんで雫が？」

雫「演劇部ですのう」

大介「ダサイ演劇部な」

雫「ダサイ美術部に言われたくはない」

大介「できるのか？」

雫「(急にぶりっ子して)城田君、告白の返事

聞かせてよ」

大介「なにそれ」

雫「こんな感じでしょ？」

大介「立石さんのイメージ……」

雫「違った？」

大介「もっと普通だよ」

「夜空を見上げるのに理由はいらぬ」  
作 ササキタツオ

雫「女子からはこう見えてる」

大介「ひがみ？」

雫「(再びぶりっ子して)城田君、告白の返事聞かせてよ」

大介「んー。わかつた……。俺……。立石さんと付き合う」

雫「イヤ」

大介「え？」

雫「そんな返事。イヤ」

大介「んだよ」

雫「だって、いやいやっばいじゃん。妥協みたいじゃん。そういう言い方は良くない。もつと言葉を選んでほしい」

大介「そうか？」

雫「女子にはイヤイヤっばく見える」

大介「んー……」

雫「はい、もう一回。城田君、告白の返事聞かせてよ」

大介「……俺も、お前の事が好きだ」

雫「おー。でました、ストレート」

「夜空を見上げるのに理由はらない」  
作 ササキタツオ

大介「これでいいだろ？」

雫「いいじゃん、ストレートがいいよ。やればできるじゃん」

大介「まあな」

雫「つてか、大介も立石さんの事が好きだったの？」

大介「え？」

雫「だっていまそう言った。相思相愛じゃん」

大介「いや。それは口からっていうか」

雫「は？」

大介「好きかどうかはわかんない。けど、可愛いと思う」

雫「え？ それは一般論だよね？」

大介「んー」

雫「何？ 好きでもない子と付き合うの？  
ウソでしょ？」

大介「だって。正直、立石さんってどんな人かわからないから。付き合っただけで好きになることもあるだろうし……」

雫「なにそれ」

「夜空を見上げるのに理由はらない」  
作 ササキタツオ

大介「じゃあどうしたらいいんだよ」

雫「そんなこと私に聞かれても……」

大介「とりあえず、さっきの返事で行くから。

付き合う方向で」

雫「どんな方向だよ」

大介「付き合います」

雫「最低」

大介「ああ。この話するんじゃないかった」

雫「そうだよ。ってか、なんで私にこんな話

したの？」

大介「雫だから」

雫「私だから？」

大介「女子だし」

雫「女子は他にもいるでしょ」

大介「いねえよ。友達だって……」

雫「そうだよね。ダサイ美術部の大介は私以

外友達いないもんね」

大介「とにかく。雫じゃないとダメなんだ」

雫「なんで？」

大介「なんでも」

「夜空を見上げるのに理由はいらぬ」  
作 ササキタツオ

雫「だったら。適当な気持ちで告白の返事な  
んてしないで！」

大介「え……？」

雫「好きじゃないなら、断る。それが礼儀だ」

大介「でも、悪いじゃん」

雫「悪くない」

大介「悪いよ」

雫「適当に付き合われる方が、最悪だ」

大介「わかったよ。じゃあ、断るよ」

雫「そうして」

大介「おう！」

しばらくの間。

雫「……やっぱり。付き合ってたあげて」

大介「え？」

雫「大介、優しいから断れないよ。きっと」

大介「そんなことないけど」

雫「そうだよ。私とこうやって天体観測にも  
付き合ってくれるし。嫌々かもしれないけ  
ど」

大介「嫌じゃないよ」

「夜空を見上げるのに理由はいらない」  
作 ササキタツオ

雫 「大介はさ。いいやつだよ。だから、付き合ったら、きっと立石さんを大事にすると  
思う」

大介 「うん……」

雫 「だからさ。付き合ってあげて」

大介 「でも。付き合うようになったら、天体

観測できなくなるぞ？」

雫 「それは、そうだね」

大介 「俺がいなくても平気？」

雫 「え……？」

大介 「どうするのかな、って」

雫 「一人ですよ、天体観測」

大介 「危ないよ。夜だし」

雫 「私は平気」

大介 「いや、でも……」

雫 「心配しないで。私、大介の言い訳になん  
てなりたくないから……」

しばらくの間。

星を見上げる大介と雫。

大介 「信長・秀吉・家康」



「夜空を見上げるのに理由はらない」  
作 ササキタツオ

雫「信長・秀吉・家康」

しばらくの間。

大介「冷えてきたな」

雫「そーだね」

大介「あれ？　そういえば、大体、俺たち何  
してるんだっけ？」

雫「天体観測だよ」

大介「ああ。そっか」

雫「でも。最後になりそうだけど」

大介「……この星の事は忘れない」

雫「……うん」

しばらくの間。

雫「帰ろ」

大介「おし。帰りにコンビニで肉まんだな」

大介、去る。

雫、空を眺め、

大介の去った方に向かって、

雫「私は、ミルクテイー！」

雫、大介の去った方に、去る。

夜空に星たちが輝いている。

(終)